

自由民主党 中央政治大学院
まなびとスコラ・オープン講座
憲法に学ぶ「この国のかたち」

第2期「まなびと夜間塾」最終講座

2021年7月21日

講師：中谷 元 中央政治大学院 学院長
テーマ：第2期「まなびと夜間塾」総括

皆さん、こんにちは。今日はいよいよ自由民主党政治大学院における「まなびと夜間塾」最終講義そして総括編ということで、学院長の中谷元がお話をさせていただきます。

皆様方と共に昨年1月から「まなびと夜間塾」が始まりましたが、第1期を終わりました、今年の2月19日から第2期をスタートいたしました。

○（スライド）講座日程表

こちらに総括を書いています。2月19日の竹田恒泰さん、そして本郷和人さんをはじめ13回にわたって、それぞれシリーズで、その時代の内容を詳しく掘り下げてまいりました。特に第2期は、戦後の自民党がどのような流れの中で、どう変化していったのか、これに焦点を当てました。

毎回、皆さんと共に議論をさせていただきましたけれども、私の総括は、実際その中に入って、その時代のことを考え、そして物事を考えないと本当のことは分からなかったということです。

私は、この学院の皆さんのテーマとして『學而不思則罔 思而不學則殆』一学びて思わざれば則ち（すなわ）ち罔（くら）し、思いて学ばざれば則ち殆（あや）うし一という言葉贈りましたけれども、まさに学んだだけではダメなのですね、思わなければ。そして思っただけではダメなのですね、学ばなければ。どういうことかと言うと、この歴史、皆さん、もうご存じのことだと思いますが、その中に入って、その真実は何か、本当は何かということ、じっくりと学ぶと分かってくるのです。それに寄り添い、そして深く絡まないと本当のことは分からないということで、ある意味、私も含めて、本当のことが分かる、そういう一連の講義ではなかったかなと思います。

○まなびと夜間塾が目指したもの 歴史から学ぶ

それでは、ちょっと掘り下げて各回のポイントをお話しさせていただきます。「まなびと夜間塾」の目指したものは「歴史から学ぶ」ということで、いろんな変遷で生まれて来たわけであり、アジア外交、日米、戦争という選択の中にも「試行錯誤の連続」でありました。「選択せざるを得ないという歴史背景」もあったし、その中から何を学んで次の段階に生かせるか、ということでもあります。そう考えるのは厄介なことではなくて、私たちの国の土壌の中で、私たちの蒔いた種が、その後どうなっているのか。先人の政治家はかなり種を蒔いてきました。成功もあれば失敗もあったのですけれど、それが今の時代、ど

うなったのかということも、このシリーズから考えることができたと思います。

○1回目(2021年2月19日)竹田恒泰先生、「楽しく歴史を学ぶ この国のかたち『天皇』」

ここにも書きました、「憲法は、どこの国でも、第1条には国のかたち」を書いているのです。日本は、というと、やはり天皇のことを書いているのです。天皇というのは『古事記』『日本書紀』まで遡りますと「万世一系の天皇を知らず」。この「知らず」という言葉で始まるのですね。

竹田先生が教えて下さったのは、この「知らず」というのは、天皇が—これは神話になりますけれども、天孫降臨、高天ヶ原から天照大神の孫のニニギノミコト(瓊瓊杵尊)が地上に降りて来た時に、「あなたは地上界に下り、国を治(し)ら(せ)せ」国を治(し)らすという大きな為すべきことを背負って地上に降りてくる。

「しらす(治らす、知らず)」とは、しる(治る) 国のことを広くおしりになりなさい。

しると、必ずやりたくなる。やはり、しることです。今でも天皇陛下は、ひたすら祈って下さっています。それはこの国のことをしる。そして祈って下っているということです。

従って、大日本帝国國憲法=明治憲法「第一章・第一條」は「天皇」、「大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と書いてあります。では今の憲法というと、「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は主権の存する日本国民の総意に基づく」。まさに、この言葉の通り成り立っているわけです。先人の政治家や国民は、ひたすら、この国をどういう国にしようかと考えて、憲法を制定したということなのです。

○先ほども言いましたけれども、「シラスとは“知らず”。何かをやろうとするときの情報の共有化」ということで、みんなで一致協力して国づくりをしていきましょう。その象徴たる言葉が「万機公論に決すべし」—明治の初めに遣われた言葉ですが、今でもそうです。民主主義は、なんと神代の時代から日本で話されていたということとしてありました。

○さて、次にご登場された講師は(第2回3月4日)、本郷和人先生、「将軍の700年」ということで、主に武士の時代ですね。1156年に「保元の乱」が起こって、武士が台頭します。貴族の用心棒だったのが政治の世界に出てくるのですけれど、平氏の政権は公家をモデルとしたため短命に終わる。しかし源氏は、軍事を任され、徐々に政治も任されていたということで、室町時代はどんどん経済、文化、外交まで、そして江戸時代はさらに、

全てを統括する頂点としての将軍になったということでございます。

○（源頼朝・鎌倉武士、「武士の武士による、武士のための権力」を作り出す）この時に本郷先生は、武士について、かなりお話をいただきましたけれども、武士が世の中を治めるために、北条氏は、源頼朝の後ですけれども、かなり考えました。北条泰時が鎌倉で「執権」の座に就いた時に「御成敗式目」を作って、将軍権力とか将軍と軍事の関係とか、その後、室町時代、応仁の乱等ありましたが、結局、いかに軍事をきちっとコントロールしていくかということも大事でありますし、地方の政治をどうするか、「守護・地頭」というものも置いて、国家統治を行ってきたということです。

○次は（第3回 3月18日）、**五百旗頭薫先生**の「(近現代の憲法と政治 戦前) 二大政党から自民党へ」。どういうふうになら二大政党から自民党へ代わったか。明治から150年と考えますと、太平洋戦争まで73年間、そして敗戦から73年間。ちょうど150年間の真ん中に戦争があったと考えていくと分かりやすいのですけれど、2つとも憲法がありました。共通したところは、短い文章だったのですね。日本の憲法は世界で最も文章が短い。ということかということ、良い部分は柔軟性があるのですね。詳しく書いていないから、後世の人々が解釈で、その時の一番いい政治ができるように、短い文章である。では悪い部分は、解釈を積み重ねると元の趣旨からズレてしまっていて、その嘘を誤魔化そうと努力している間をつく「必死の嘘」。まあ「必死の嘘」ならまだいいです。そのうちバレてもいい、どうせ無理だと開き直って「横着な嘘」は開き直った嘘になる。これは最悪なのです。そうすると国民が政治から離れて行ってしまうということで、きちんと分かりやすい憲法にしておかないと、あまりにも解釈、解釈、解釈でくると横着になってしまうという指摘をされました。

○この時に憲法を作ったのは、伊藤博文、井上毅という官僚、行政のプロであります。以降、政党ができるのです。自由党と立憲改進黨。自由党は勢いと元気があって、国民に近い。国民の感性で、自由民権運動から育っていますので、国家の元気、人民の権利を追求し、武力、暴力によらない国内改革という方向で民主化をしていく。

一方、立憲改進黨は与党、政府側に立って政策をきちんとやっつけていこう、そして統治能力のある政党を作って、あまりガタガタしない。イギリスの政党内閣を目指していますが、「政策中心」、政策を決めることを中心に考えてきた。ということで両党が相まって、今の与党と野党のように、二大政党で来ているのです。その間に、なぜ、この二大政党が終わ

ったか、というと、

○国体明徴運動が昭和10年(1935年)からありました。不景気になって世界中が軍国主義が台頭するのです。第1次世界大戦があって軍人が非常に力をつけてきた。そういう中で軍も予算が欲しいのです。ロンドンの軍縮条約なんかで軍の予算を削りました。その時に議論された(天皇機関説)、美濃部達吉という、美濃部(亮吉・元)東京知事のお父さんですけど、憲法学者(貴族院議員)がいて、「天皇は憲法の機関の1つである。それにすぎません…」と発言した途端に軍部から強い反発がありました。そして国会で罷免されるのです。いわゆる社会的に抹殺されて、国会議員を辞めろということであったのですが、ただ辞めただけで終わらなかったのです。その時の岡田啓介内閣は、国体をきちんと国会で明らかにしろ。これが「国体明徴論」でありまして、

○そういう時に「国体明徴に関する政府声明」というのが出て、

「政府は國體の本義に關し所信を披瀝し、以て國民の嚮ふ所を明にし…」所信を明確にしていくという中で、「統治權の主體が天皇にましますことは我國體の本義にして、帝國臣民の絶対不動の信念なり…」と。

いま思えば、とんでもないようなことを明らかにしました。それまでは民主的で、言いたいことも言っていたのですが、軍国主義が盛んになって天皇を利用する。そして天皇の下に予算を取っていくということで、天皇色が非常に強くなってくるのです。そういうことで二大政党が潰えて、翼賛体制になって戦争にどんどん行ったというお話でした。

○次は(第4回 4月1日)、元東京都知事(作家)の猪瀬直樹先生。「昭和16年夏の敗戦」ということで非常に面白い話ですが、昭和15年、「総力戦研究所」というものを政府がつくったのです。どういうことかということ、戦争をした場合に、この国は勝てるかどうか、内閣でも検討しましたが、一般の専門家を集めていろいろと分析をさせました。昭和16年7月に、近衛文麿総理と東條英機陸軍大臣から、日米開戦を想定した机上演習が命ぜられ、ソ連も参戦する中で日米開戦は日本が「負ける」という報告をしたのです。その時に聞いた東條陸軍大臣は、

「諸官らの労を多とするが、戦争はやってみなければ分からないという部分が抜けている…」ということで、まあ3年以内に決着すれば、何とか勝てるのではないかという結論を出すわけですが、この時に、その勉強会の責任者、鈴木貞一企画院総裁という方がいました。

○（昭和 17 年 10 月 29 日 政府連絡会議で開戦を議論）

これを本に書きたいということで猪瀬直樹さんが鈴木企画院総裁を訪ねました。あなたは当時調査をして昭和 18 年には国産石油 25 万トン、人造石油—石炭を石油に変えると 30 万トンできる。昭和 19 年には 40 万トン、翌々年 50 万トン（確保は期待値）で、占領で 3 年後に残量が 70 万トン。3 年間は戦えますという結果を出しました。それで開戦が決まっていくのですけれども、「本当にあなた、それでよかったのか？」と猪瀬さんが鈴木さんに聞きましたら、

○（11 月 5 日の御前会議で報告した鈴木企画院総裁の証言）

「僕は腹の中ではアメリカと戦争をやって勝てると思っていなかったから、とても憂鬱な気持ちで読み上げた。陸軍が戦争をやると言ったが、腹が痛まないの、勝手なことを言っていた。海軍は、できないと言わなかった。やらないといたら予算が取れない。やるとも、やらないとも言わない。海軍は、自分の報告の効果を知っていたはずだ。数字は『やる』というつじつまあわせに使われた。客観的で、戦さにならないように考えてデータを出したつもり。石油は『残る』。3 年間分出されたが、やれるということだから。でも、戦争を何年やるかという問題なのだ。仕掛けた後は緒戦に勝利して、すぐに講和にもっていく。その戦いがせいぜい 1 年か 2 年。そうすれば石油は多少残ると踏んでいた。とにかく僕は憂鬱だった。やるかやらんかといえば、もうやることに決まっていた。やるために、辻褄を合わせるようになっていた。僕の腹の中では戦さをするという気はない。企画院総裁としては数字を出さなければならん。結局、自分の役割が、空気の中にいた。そういうことになってしまうのだろう…」。

実に正直に、お答えになられました。これ、今の政治にも言えるのですね。政府がどんどん前へ進んでいく時に、ではブレーキかける人がいるの？ いろいろと思いつく節はありますが、こういう時は事実即して、言うべき人が言わないと、止まりません、ということで、猪瀬さんはこういうことを紹介します。

○アッシュの実験用カード。どういうことかという、アメリカのアッシュという人が、左側の線と同じ長さのものはどれでしょうと質問し、皆に答えさせるのです。（被験者が）7 人目ぐらいにいて、あとは皆サクラです。左？ 右？ と聞くと、みんな左、左、左と言うのです。10 人中 1 人だけでも右という、答える人は自分の思っていることが言え

るのですけれど、皆が左、左、左と言うと、右と思っても言えなくなる。この『『空気』の研究』をアメリカは「ファクト実証実験で証明」しまして、やはりそういう空気が出来上がってしまう。メディアも全く同じ方向へ行くと（そっちに空気ができていっちゃう）。テレビもコメンテーターも全く同じことを言う人が揃ってしまうと危ない。政策決定する時は、きちっと空気を変えていくという問題。やはり鈴木さんは、ここで俺は間違えたなという自覚があった。「いや、何とかならないかな」という思いもあったということです。

猪瀬さんが最後に紹介したのは小泉総理。小泉総理は変人だからブレない。変人は秀才じゃないからブレません。信念がある。ブレてはダメ。国家戦略は大きな枠組みなので、変人がブレないでリーダーシップを発揮しないと出来ないということ、そういうリーダーを持たなければいけませんし、やはり本当のことは本当だと言い続けるスタッフが必要だというお話でありました。

○次は（特別講座 4月8日）、**門田隆将先生**の、根本博という陸軍中將の話が面白かったです。政治家、軍人には本義というものがあって、政治家は国民のために働くのですが、軍人の本義とは、まず1つが「上官の命令に従う」。要するに任務を遂行する。もう1つは、「日本人の生命、財産、領土を守ること」。終戦前、モンゴルに4万人の（在留邦）人がいました。8月15日に、武装解除の命令が来る。軍人は武器を捨てよという命令が来ますけれど、根本さんはそれを捨てなかったのです。というのは現地に4万人の邦人が残され、自分は軍人として彼らを全員、安全な所へ連れて行かなければいかん。そのために、ソ連が越境して来ましたが戦いながら北京まで引き揚げたのです。その時に蒋介石が助けてくれたということで、その後、日本に帰っていましたが、台湾と中国の戦い、いわゆる中国共産党の戦いの時に、蒋介石を助けに行くのです。国民党が劣勢に立たされて、蒋介石を手伝いに…。台湾へ密航（密入国）している。なぜなら、その時に助けてもらった恩を返そうということ。

○（蒋介石と会えることになり、金門島の戦いに挑む。）金門島へ行った時に、共産党が攻めて来て、彼は、（湯恩伯）将軍の下に戦いに挑みます。共産党のジャンク船・木造船で1回およそ2万人を金門島に上陸させて、ジャンク船を焼き尽くす。次から来ないように、そこで全滅させて、守ることができた。そういう作戦をやったことで台湾に恩返しをしたという話がありました。

○そのとき門田さんが言ったのは「アジア版 NATO」ですね。これが要るのではないか。そのためには憲法を改正し、「自衛隊の合憲化と集団的自衛権」、この抑止力によって平和を守る。今、中国が力による現状変更をどんどんやっていますが、アジアの安定を保つためには、やはり集団的自衛権が要るのではないかということで提案されました。クアッド（日米豪印戦略対話）などもただやるだけでは、実行力がないとダメなのですね。

門田さんの「憲法九条」私案、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求する。わが国は、国際平和の維持と国民の生命・財産および領土を守るために自衛隊を保有し、いかなる国の侵略も干渉も許さず、永久に独立を保持する」。これでいいのではないかという案を出してきましたが、今日は石破先生も来られていますので、また後で、ご意見がありましたら聞かせていただきたいと思います。

○その次は（第5回 4月15日「米国の日本占領政策・マッカーサー元帥」）、楠綾子先生、マッカーサーについてのお話をいただきました。米国一国による独占的な占領、天皇制を維持した間接統治など、彼の思い描いた日本の国家改造は、ほぼ成功したのです。占領期の日本の政権を見ると、新旧憲法下で6代5人の総理大臣、いずれも短命。やはり占領政策と憲法改正をはじめとする性急な国内改革によって社会的な混乱がありましたが、マッカーサーは、政治・経済・社会の自由度の上昇をもたらして、今日に続く社会の強靱性と統治の正当性を与えたということで、非常に大きな使命感を持って改造したのですけれど、あまりワシントンの言うことを聞かなかったのですね。

○（「マッカーサーの存在」非常に強烈な使命感。）

将来、大統領選挙に出ようとしたのですが、独自路線を貫いて、日本を理想的な、国際連合の精神に従った国にしよう。そのとき天皇陛下と出会って、非常に尊敬して、やはり「日本には天皇陛下が必要なのだ」ということで憲法にも天皇陛下のことを書きましたけれど、日本国民を誇りと敬意をもって統治することに成功した。そして占領者が慕われるという特殊な現象が起きたということで、彼がいてくれたおかげで変な国にならなかったと言えるのかもしれません。

○「占領期の首相に求められる資質と役割」ということで当時、東久邇宮（稔彦）、幣原（喜重郎）、吉田茂、片山哲、その後、芦田均などもいまして、トータル6人。ところが、国会で安定多数を持っていたのは1人もいなかった。第3次吉田内閣以降、ようやく国会

で与党が安定多数を得る。ということではありますが、占領期の半分以上は、なり不安定な内閣、政権基盤としては相当不安定だった。

東久邇宮は皇族。(終戦で) 権威が必要。幣原さんは外交官で、英米と協調外交、そしてマッカーサーと話が合うということが求められたのです。

○次は(第6回講座 4月 22日) 北康利先生の「吉田茂 ポピュリズムに背を向けて」ということで、吉田茂の時代のお話をいただきました。時代を語るには、当時のことを想像しろ。上野の西郷さんの銅像は、真っ白だったそうです。なぜ白かったかということ、探し人(尋ね人)の張り紙で真っ白。上野の山から東京湾が見渡せた。そういう時代に彼が何をやったかということ、やはり三顧の礼でブレインを集めて仕事をした。そして、偉人と呼ばれる人は必ず「運と愛嬌」に恵まれているということです…。

○(吉田茂は、何をやりたくて首相をやっているのか明確。)

(吉田総理は) 若い人が非常にたくさん死んでいるのですね。その若い人のために自分は私利私欲を捨ててやっていかなければいかんし、国民にも飯を食わさなければいかん。ということで、全く私心なくやってきた。そういうことの手精神が必要だということです。

○彼はどうして総理になれたのか。絶対に早く終戦させなければいけないということで、憲兵に逆らって逮捕されてまでも牢屋の中でじっと平和を願い、「二度と戦争を起こさない国にするという信念」があった。それから「皇室を大事」にした。そして「真の独立」を目指そうとした。彼はイギリスに留学して西洋の民主主義を学んでおりますが、プラグマティック・実用主義、道具主義、実際主義。マスコミが反対しようが、学会が反対しようが、まず、部分講和を結ぶことが大事。ポピュリズムに毒された人間は要らない。バカヤローと言いました。我々が考えなければならないのは自分のことではない、次世代のことだ。そして彼の残した1句、「新憲法棚の達磨も赤面し」(素准)一恥ずかしい憲法ですよと言った。

○日米安保条約(の調印)も、サンフランシスコのバラックで、本当に粗末なところで、池田勇人などに「付いて来るな」といって、単独・独断で条約を結んだのですが、ずっと恥ずかしいと思っていたそうです。しかし、独立を選んだ。最後の最後まで、ずるずる、

ずるずる、政権を続けて、安保条約もつくりましたが、最後は安保条約も、今のままではダメだと思いながら、1人で調印をしたとされています。

○その次は（第7回 5月13日）**矢嶋光**先生「芦田均と日本外交 連盟外交から日米同盟へ」ということで、芦田均も外交官から政治家に転身したのですが、彼は国際連盟の考え方に共感したのですね。要するに「集団安全保障」、そして集団自衛権—このとき集団自衛権はなかったのですが。「集団安全保障」。つまり戦争をやってはいけませんというだけ。戦争をやった国は皆で叩きましょう、という国際連盟に彼は心酔をされていて、彼を「冷たい」とか「冷酷な人間」とか「合理主義」者というイメージありましたが、満州事変の後、外交官になりました。戦前のリベラリストの芦田と、戦後のリアリストの芦田、これがどう接続するかというとやはり国際連盟なのですね。

○彼は、国際的に貢献するという国際連盟の理想を日本国憲法に★見いだそうとしまして「芦田修正」なるものを実現いたします。よく読めば、憲法9条は、まさに国際連盟の条文を実現するための条文と読めるのですね。戦争をやった国は国際社会が徹底的にやっつける。戦争をしてはいかんよということが書かれていますので、そういう思いで書いたのです。残念ながら「芦田修正」は、まだ採用されていなかったわけではありますが、そういう考えでずっとやってきました。

○それともう1つ、「東亜新体制批判」。これは、中国と日本が世界秩序を作っていくのだという考えで、日中戦争を戦前、正当化しようとしたのですが、これはおかしいのではないかな。やはり英米と組まなければ、日本がまさに中国をもう侵略しているわけであって、国際法に違反している。だったら日本は当然、制裁になりますよと。そうなったら英米と日本は衝突するということで、こんなアジア新秩序などできるわけないよと、公然とやってきたということです。

○その後は（第8回 5月20日）、**野田毅**先生から「主権回復」ということで、4月28日、主権回復した日（主権回復記念日）をしっかりと思いましょ、ということで、野田先生が言ったのは、憲法解釈の連続だ、と…。

○事実上、実定法としての憲法の中身が変わってきているので、現状はずいぶん変わっているのにもかかわらず、条文は変わっていない。解釈で合わせるしかないという超法規的発想が積み重ねられている。何のため憲法が分からなくなってきたので、憲法改正の必要性があるということでした。

○続きまして（第9回 5月27日）、一橋大学の**中北浩爾**先生から「保守合同」。ついに戦後、自民党ができるために、自由党と民主党がくっつくわけであります。これは「共産勢力からの脅威」に対抗するということで、社会党の左派と右派が合併をして、それは大変だということで保守の合同が成ったのです。結党時は10年も持てばいいといわれるぐらいの状況でありましたが、65年以上の歴史を積み上げてきた。それはまさに日米同盟と経済成長という軸があり、「持続と変化」「伝統と革新」「理想と現実」、これを繰り返し、時代の要請に柔軟に答えを出す努力と知恵を身につけてきたということです。

○続きまして（特別講座 6月1日）、**保阪正康**先生、「石橋湛山の65日 首相の格は任期にあらず」ということで、もともと（石橋は）東洋経済新報社の経営をされていて、吉田総理に抜擢されて大蔵大臣になりますが、公職追放になるのです。どうして公職追放になったか。マッカーサーとかGHQと激しく対立して意見を譲らなかった。コノヤローということで、戦争犯罪人じゃないのに公職追放になった。

○吉田茂に言うと、吉田茂が笑いながら「犬に噛まれたと思ったらいいんじゃないか…」と言われて、バカにするなど。以来、吉田茂と仲が悪くなったということでもありますけれど、そういう思いを貫いて、民主党の党首にもなったりして保守合同、そして自民党の第2代目の総理大臣になるのですよ。たったの65日で終わってしまったのですが、彼の考えたことは非常に優れていたということです。

○（第10回 6月3日）**田原総一郎**先生からは「岸・池田総裁時代」。これも60年安保の時に、この条約改正のために身をもって尽くしたのですが、この時も集団的自衛権のことに触れておりますけれど、世間が大騒ぎをしたために、やりきることができず、半分ぐらいの改正に終わりましたが、

○この後、池田（勇人）総理。「政治の時代」から「経済の時代」へ、「所得倍増」。この時から憲法改正を全く言わなくなったのです。とにかく経済だ、そして社会保障だ。自民党が今まで生き延びて来たというのも、憲法改正の前にやはり国民生活の安定があったということなのです。

○（第11回 6月10日）北原建児先生からは「佐藤・田中総裁時代」。

佐藤さんの番記者、読売新聞の記者で、特ダネを取るために、情報を掴んでトイレに行ったら、佐藤総理が用を足していて、チャンスだと思って「これ本当ですか？」と聞くと、フンフンとか言って笑いながら肩をたたいて否定しなかったのが、それを出したら特ダネになったとか、佐藤さんはそういう思いやりというか温かさも非常にあった。情に厚いということもありましたが、佐藤さんは「沖縄返還」そして「日韓基本条約」、こういうこともやりきったということでもあります。

○田中角榮総裁時代

田中角榮さんは大平外務大臣と二階堂官房長官といった強力なパートナーを政権に入れて、就任後わずか2ヶ月で「日中国交正常化」を成し遂げた。これは大変なのです。台湾との関係もありましたけど、決断力でリーダーシップを★図りましたが、やはりアメリカに裏切られるのですね。それで失脚しました。非常に強力な実行力があったのですが、戦後の人気総理大臣ナンバー・ワンじゃないかなと言われていました。

○続きまして（第12回 6月17日）、橋本五郎先生は「三木・福田・大平・鈴木・中曽根・竹下時代」、いずれも番記者をやっていたということで、これまで24人の総理大臣を見てきたという、その気持ちですね、総理大臣の人柄、魅力、心、そういうことに感動したということでした。

○続いて（特別講座 6月23日）、自民党政治大学院の福富健一教授から（「重光葵 連合軍に最も恐れられた男と保守合同」）、重光葵さん、外務大臣ですが、GHQ とミズリー号で降伏文書に調印した方です。中国での式典で足を吹っ飛ばされて体が悪かったのですが、それでも精神は強かったのです。戦前も見てきましたが、公職追放になっても保守の結集の

ために改進黨を立ち上げ、鳩山一郎さんと日本民主党をつかって第1次保守合同をしたという功績があります。言うべきことは言って連合軍に一番恐れられたということでした。

○（特別講座 7月1日）後藤謙次先生からは「中曾根・竹下・宇野時代」。平成の初め、鈴木善幸さんが退陣表明をしたことで仰天しましたが、中曾根内閣は行革・3公社民営化、また日韓関係正常化、ロン・ヤス関係、優れた外交力、そして「消費税の導入」。

「この顔が嘘をつくかと嘘をつき…」というようなことで、非常に苦労しながら消費税導入しましたが、おかげで今、財政的に助かっている部分もあります。残念ながらリクルート事件が発生しまして、竹下内閣以降も退陣しましたけれど、中曾根さん、竹下さん、この時代は、いわゆる自民党の黄金期だったということです。

○次は（特別講座 7月7日）河野洋平元（自民党）総裁に来ていただきました。下野する前は宮澤内閣の一員で官房長官。これはもう政治改革。カネとスキャンダルで大変で、政治改革の関連法案を実現した。一度、参議院で否決されているのですね。そこで細川（護熙）さんと河野総裁が会談をして小選挙区に道を開いたわけですが、非自民の7党1会派に対して、よく自民党も政権復帰ができたということです。

○その後（第13回 7月15日 海部・宮澤総裁時代）、資料はありませんが、御厨貴先生に締めのお話をさせていただきました。

皆さんも、この講義を1つ1つ聴いていただいて、いろいろなことをお考えになったと思いますが、今日、私の講義は、この程度でお終いであります。

石破先生、最終回なので、今まで参加されたり、これまでお話を聞いてこられまして、感想というか、所見をいただきたいと思います。

○石破 茂 衆議院議員

恐縮です。あまり真面目に出なくて、3分の1も出ていないのですが、「自民党というのは一体、何なのだ？」ということ、我々議員もそうだし、お支えいただく党员の方々もそうだし、もう一度よく考えてみたいと思っています。なにも自主憲法制定は右翼の話でも何でもなくて、この国が「独立主権国家」であるとはどういうことなのか。私たちに人権というのがあって、人権は、いわゆる左派の専売特許ではないのであって、1人

1 人のいろいろな基本的人権がきちんと保障される。そして民主主義によって物事が決ま
っていく。民主主義はチャーチルが言ったように「この世の中で最悪の政治制度である。
今まで存在したありとあらゆる政治制度を除けば…」

チャーチルらしい言い方だけど。民主主義をどうやって守っていくのかということなの。
だけれど。自民党は単なる利益の分配集団じゃないと、私は思っているのです。やはりこ
この国のあるべき理想を追求する。それがないと政党の意味はないのだろうと
思っていて、いろいろな方がいろいろなお話をされたけれど、自由民主党は理想を追求する
集団であり、学者ではないのであって、現実立脚しながら理想を追求する。そういう
政党として、もう一度、国民に信を問いたい。そういうようなことではないかと思
ったりしております。

「この程度の国民には、この程度の政治家」という言葉があって、私も時々
そういう言葉に与したい誘惑には駆られるのだけれど、それを政治の側が言
ったらお終いと思うのです。やはり私たちが理想を語り、過ちを正すこと
によって、有権者というのか、主権者というのか、それは感動してく
れるのだと思っていて、私は政治から感動というのがなくなってしま
った。そして政治から謙虚とか誠実とか、それが死語になってしまった
というのは結構怖いことなのです。その格差と分断は資本主義の行き着
く果てなのだけれども、自民党はその資本主義を目指してきた国の政
党ではないはずなのであって、党って何だということをお聞きか
ける、それがこの中央政治大学院の真髓かな、なんぞと思ったりして、
さらにこれを発展させていただき、塾員の方々にもそれを問いかけて、
我が党を支えてくださいというよりも日本国を支えてくださいとい
うことだと、私は思ったりしているし、それに値する自民党でありたい
な、なんぞと、いつものようなきれいごとで恐縮ですが思っております。

中谷学院長

ありがとうございました。常に考え続けていって、変わり続けていかないと、
政権も担えないし、政党としての役割を果たせないということでありました。

今回で、このシリーズは終わりますが、1年半にわたり、皆さん見ていただき
ありがとうございました。思い起こせば、去年の1月、スタートした時は、
自民党の8階ホールに1,000人以上が来て、9階も8階も満員になっていま
した。コロナがあって、それ以降、リモートという形になりました。全
ての活動が制限されますが、この1年半、自らを振り返る期間として、
政治的に非常に大事な期間です。世界中の政治がこのコロナで変わ

っていく。オリンピックもありますけど、これから新しい世界がつくられるわけでありまして、自民党もどうするのか。今、1 党多弱とか言われて、のんびりしているようなところもありますが、決してそうじゃないです。いつ落とされるか分からない。国民の信頼を失ってはいけないということでもありますので、ずっと学び続けていくということは大事でありますし、この中央政治大学院も立党以来六十数年存在しておりますので、また、こういう場で皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

最後に、もう一度、「学而不思則罔 思而不学則殆」——学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆うし——やはり思うことですね。学ぶだけじゃダメなのです。

このシリーズ、全て YouTube で公開していますし、議事録（講義録）も検索できるようになっています。ぜひ振り返って、大変素晴らしい講師の連続でありますので、何を言っていたのか、これは繰り返して思わないと分かってきませんが、ぜひ、こういう中で皆さん、本質とか大事なことを学んでいかれば、ということで、学んでいただいた皆様方に、心から感謝と御礼を申し上げます。

「第 2 期まなびと夜間塾」は終了になります。また「第 3 期まなびと夜間塾」で、お会いしましょう。どうもありがとうございました。

（おわり）